

湿度環境と皮膚の乾燥状態との関連についての基礎的研究

○五十嵐由利子* 安藤昌恵** 大淵律子*³ 大森淳一*⁴ 北原博幸*⁵
高橋啓子*⁶ 高田浩行*⁷ 橋本修左*⁸ 梁瀬度子*⁹

(*新潟大 **横浜市立大 *³都立医療技術短大 *⁴ダイキン工業(株) *⁵(株)前川製作所
*⁶愛知江南短大 *⁷三洋電機(株) *⁸武蔵野女子大 *⁹武庫川女子大)

【目的】 これまでの高齢者施設での実態測定から、冬季の低湿度環境が高齢者の皮膚掻痒症の悪化等と関連があるのではないかと推測された。そこで、本研究では、湿度環境の改善が皮膚の乾燥防止にどのような効果をもたらすかを検討するため、恒温恒湿室において基礎実験を行った。

【方法】 RH30%と50%の2室(室温24℃)を用意し、被験者は各室にそれぞれ60分間在室し、その間、皮膚水分量等の測定を行った。実験開始前及び両室間移動の間の前室での安静時間を含め、全行程220分を1回の実験とした。同一被験者による実験を2日間とり、最初に入室する実験室を替えた。また、被験者は高齢者・若年者各4名、計16名とし、同一の実験着を着用した。

【結果】 皮膚水分量の値は個人差がかなりみられたものの、両室とも入室後40分後で比較的安定した。若年男性以外はRH50%の室内において皮膚水分量が高くなる傾向が見られた。また、退室直前の室内空気の乾燥感についての評価では、RH30%ではほぼ半数が「やや乾燥」、RH50%の方でほぼ半数が「やや湿っぽい」と評価し、両室での違いが見られた。

なお、本研究の一部は(財)住宅総合研究財団の補助金により行われた。